延世大学図書館出張報告―図書館システム管理における協力体制の確立を目指して―

田邊（たなべ）　稔（みのる）
（三田メディアセンター課長代理（2011年９月まで））

●はじめに

空前の韓流ブームである。といっても，ペ・ヨンジュンやチェ・ジウといった大物俳優が登場した一世代前の韓流ドラマブームとは異なり，東方神起や少女時代，KARAなどのK-POPを中心とした「第2次韓流ブーム」である。どうして日本人はここまで韓国に惹かれるのか？統計的に見ても，『日本人の6割が韓国に好感を持っているのに対し，韓国人の6割は日本を嫌いと言っている』ようだ[1]。「そのような国に乗り込んでフレンドリーな打ち合わせが成立するのだろうか？」と不安だったが，実際に現地入りして延世大学図書館（以下，延世）の方々と話を始めたら，そんな心配は吹き飛んでしまった。

●経緯

事の起こりは，2009年度にゲント（ベルギー）で開催されたIGeLU（Ex Librisユーザ会）[2]に端を発する。慶應からはメディアセンター本部の杉野と五十嵐が参加したが，このときに延世のメンバーも多数参加していた。そこで，自らを「ヨン様」と呼ぶ気さくなLee Won Sang氏と知り合いになり，システム見学依頼を打診したところ，快諾してくれたことが今回の訪問につながった。出張計画当初は筆者のみの弾丸日帰りツアーを企画したが，あまりに勿体ないので，3名での1泊2日コースに切り替えた。また，2010年12月初めに渡航予定だったが，11月下旬の北朝鮮による延坪島砲撃により延期となり，情勢の安定を確認の上，ようやく1月末訪問に至った。

●目的

今回の訪問の主目的は，双方にて導入および運用しているEx Libris社製パッケージ群[3]のシステム管理面の課題共有と今後の連携強化である。連携を密にして，不具合や改造要望などの情報をシェアし，共同でEx Libris社（以下，E社）に改善要求をプッシュする体制をつくること。そして，外付けツールやAPIなどを効果的にシェアすること。今回の訪問をその第一歩として位置付けたいと考えた。

●概要

今回の研修の概要を以下に示す。

1. 日程：平成23年1月27日（木），28日（金）
2. 訪問先：延世大学図書館サムソンライブラリー
3. スケジュール

＜1月27日（木）＞
13：00　延世大学着，副学長兼図書館長に挨拶
13：20　システムミーティング
18：00　終了
＜1月28日（金）＞
10：30　サーバールーム見学
11：00　サムソンライブラリー見学
13：00　見学終了

4. 参加メンバー

1）慶應側：関　秀行（本部総務担当），田邊　稔（出張当時：本部システム担当，執筆時：三田閲覧担当），島田　貴史（理工閲覧担当）の3名

2）延世側：Choi, Moon-Gun（副学長兼図書館長），Yi, Jong Chang（Librarian, Team Leader of Digital Media Service Team），Park, Jin Kyeun（Librarian, Coordinator of Multimedia & Information Commons），Park, Jung Eun（System Librarian, Coordinator of Digital Media Service Team），Heo, Young Seuk（Librarian, Deputy General Manager of Circulation and Access Services Team），Lee, Won Sang（System Librarian, Coordinator of Digital Media Service Team），Chae, Junglim（Librarian, Administrative Services）の7名

5. 延世大学，延世大学図書館の特徴

韓国最古の名門私立大学（1885年創立）で，学生数約28,000，留学生約5,000，教員数約3,500，職員数

約 6,600。図書館の設立は 1915 年，新図書館であるサムソンライブラリーは 2008 年で，現在では 2 つのメインライブラリーと 3 つの分館を持つ。蔵書規模は，約 200 万冊の紙の蔵書，1 万 6 千タイトルの雑誌，データベース 220，電子ジャーナル 65,000，電子ブック 28,000。図書館職員数 50，サポートスタッフ数 49。館内 PC 約 500 台，閲覧席数約 6,300，グループ学習室 16。E 社パッケージの導入は 2009 年から。約 200 万冊に RFID を貼り実用化している。

●システムミーティング内容

システムミーティングは以下の分担で行った。

1. メディアセンター概要説明（関）
2. Aleph/Primo/SFX に関する懇談（田邊）
3. 電子学術書利用実験プロジェクト説明（島田）

言うまでもなく，大半の時間を今回の主目的である上記 2 の懇談に費やした。事前に質問事項を提出していたため，比較的スムーズに進められた。また，英語での会議を覚悟していたが，幸運なことに，延世側で日本文学を研究している学生さんに日本語の通訳をアサインしていただいていたため，懇談の大半を日本語で進めることができ大変助かった。但し，そもそものボリュームが多すぎて，尻切れトンボに終わってしまったのが残念だった。

●懇談の印象および慶應との比較

Aleph/Primo/SFX 懇談の全体的な印象としては，大きく以下の 2 点が挙げられる。

1）慶應と比較して，Aleph や Primo をあまりカスタマイズしておらず，パッケージをそのまま使っているような印象を受けた。つまり，日頃苦労している点もかなり差異があるということがわかった。

2）図書館システムを取り巻く環境が異なるため，外付けで開発している部分が慶應とは異なる。

例えば，延世の場合，一元管理された大学の利用者 DB と Aleph の利用者 DB がシンクロしているため，利用者登録や My Library などの認証サービスの運用が楽（図 1）だが，慶應の場合は keio.jp と Aleph の利用者データが別々に管理され，非同期であるため，連携に苦労している。

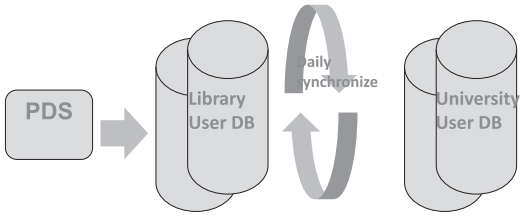

図 1.　延世におけるユーザー認証方式

また，慶應と異なり延世には大きなキャンパスが 2 つ（Seoul と Wonju）のみのため，Primo や SFX における館（Institution/Instance）ごとの管理がシンプルである。例えば，キャンパス毎に Primo や SFX の画面デザインを変えたいといった場合，延世では 2 種類で済むのでメンテナンスも楽である。なお，慶應と延世の主な比較については次の表を参照されたい。

表 1.　慶應と延世の主な違い（機能，環境，対応状況などの比較）

比較項目	慶應	延世
地区＆インスタンス	6 キャンパス，6 インスタンス,9 地区,1 ビュー（KOSMOS 端末用は別）	2 キャンパス，1 インスタンス，5 ブランチ図書館毎のビュー
Primo Central	未導入（デモを見た程度）	導入済（2 検索タブ），精度はあまりよくない
自動貸出機	Sip モジュールの検証待ち	機器＆ RFID とも韓国メーカーを採用，利用率 50%
RFID	なし（バーコードラベル）	開架書庫全資料に RFID 添付済
性能評価，ログ分析	E 社推奨のツールで負荷テスト実施 検索ログをマイニング中	負荷テストツールなし 検索ログは外部ツールに任せる
サーバ環境，バックアップ	2 地区の図書館で分散管理 富士通 IA サーバで信頼性重視 “ACM”（Cold バックアップ）	図書館とは別の建屋の広いサーバ室で集中管理 HP IA サーバで価格重視 “TINA”（Hot バックアップ）
カスタマイズ範囲	大（外付け機能てんこ盛り）	少々（ほぼパッケージのまま）
E 社サポート	E 社本部（HQ）ダイレクト	韓国の E 社オフィス経由

懇談の最後に，E 社のサポートについて，韓国の E 社窓口（リージョナルオフィス）の件を聞いたら延世メンバーの顔が一瞬曇った。「キャンパスの近くに

あって，何かあればすぐに駆けつけてくれるからいいですね」と言ったら,「慶應の方が直接 HQ（E 社本部）とやりとりできるので対応が早くて良いのでは？」と返された。果たして，どちらが幸せなのかわからなくなった。

●電子書籍（e-Book）への取り組み

韓国での e-Book の取り組みは, 業界的には活性化してきたが，大学ではまだまだのようで，主な理由は，権利処理が煩雑なことと出版社が消極的であるとのことであった。延世では 2010 年終盤から取り組みを始め，現在約 2,000 冊が利用可能（慶應の電子学術書利用実験プロジェクト[4]での目標冊数とほぼ同数）となっている。e-Book の性質上，学術的なものよりも教養的なものが人気があるとのことである。教養書はラフに読まれるので電子向きだが，学術書はじっくり考えながら読むものとの認識が強い。しかし，iPad などの大画面の携帯情報端末出現により活性化する可能性も大きい。

●見学（サーバールーム，サムソンライブラリー）

図書館とは別の建物にあるサーバー室に案内され，足を踏み入れてまず驚いたことは HP（ヒューレット・パッカード）社製のサーバー群で埋め尽くされていたことだった。理由を聞いてみたところ，予想通り「安くて壊れにくいこと」だった。慶應義塾の前図書館システム（KOSMOS II）のサーバー群が外部ストレージを含め全て HP 社製だったため，思いがけず郷愁を感じることとなった。

写真　左から Park Jin Kyeunさん，ITセンター長，関，島田，田邊

サムソンライブラリーについて，ここでは詳細には触れないが,“ユビキタス図書館”と言っても過言ではないほど利用環境に優れていた。ラーニング・コモンズ（学習環境）も圧巻だったが，大型 LCD の図書館案内板，タッチ式の目録検索や新聞閲覧用の大型ディスプレイ，ディスプレイ一体型のテーブルなど, 至るところに大型ディスプレイが設置され，いつでもどこでも必要なコンテンツが利用できる環境が整備されていた。サムソンからの莫大な資金提供[5]も然ることながら, 利用者ニーズを先取りしたデザインセンスの良さにも注目すべきである。

●終わりに

今回の訪問では, ミーティングや見学に留まらず，懇親会から送迎に至るまで大変暖かい歓待を受けた。先だって慶應を訪問された Choi 副学長兼図書館長の取り計らいに深く感謝したい。今後，延世メンバーが慶應を訪問される機会があれば恩返ししたい気持ちでいっぱいである。

近いようで遠い国，韓国。『韓国の慶應』と呼ばれる延世大学を訪問できたことは大変刺激になった。当訪問で終わらせることなく，今後も継続して延世との交流が続くことを強く望む。このような貴重な機会をいただけたことに，この場を借りて感謝申し上げたい。

注

1）中央日報日本語版ニュース記事より
・日本人 6 割「韓国に親しみを感じる」. http://japanese.joins.com/article/957/124957.html?servcode=A00&sectcode=A10, (参照 2011-09-10).
・韓国の若者「日本は近くて近い国」. http://japanese.joins.com/article/943/124943.html?servcode=A00&sectcode=A10, (参照 2011-09-10).

2）IGeLU（Ex Libris ユーザ会）. http://igelu.org/, (参照 2011-09-10).

3）Ex Libris 社製パッケージ群とは，Aleph（図書館業務システム）や Primo（ディスカバリーサービス），SFX（リンクリゾルバ），Verde（ERMS）などを示す.

4）慶應義塾大学電子学術書利用実験プロジェクト（e-KOllection）. http://project.lib.keio.ac.jp/ebookp/, (参照 2011-09-10).

5）サムスン，延世大に 3 百億ウォン寄付. http://contents.innolife.net/news/list.php?ac_id=2&ai_id=42606, （参照 2011-09-10).